

# レイアウトサンプル

標準仕様の例 A5判 明朝 41W × 15L (615字/頁) (文字サイズ 11pt, 行間 20pt)

種彦は序文で「天保三年春、花吹雪と題した絵双紙は、この仙客草・柏琳の作である。その頃  
は名を知らなかつたので、相州磯部と地名を記しておいたが、その筆紙が柏琳の眼にふれて、  
昨年名を知らせて来た。この星下りの稿本は、文政十一年六月（註：柏琳三十二歳）に成書した  
もので、自序がある。ゆゑは花吹雪と同じ作者であると推し記しておく」と述べて  
いる。その通りなら、稿本の完成後六年経って出版されたことになる。

その自序は、「私も相州の片貝舎に住み、朝霧れ山野を歩き回っているが、四季の榮華が  
が無くはない。土衣賣の妙傳の噂いひえを書き連ね、燈下に筆を磨みながら叙述して  
いる」との主旨であり、副題に「妙傳幸利生物語」と付している。

妙傳寺は厚木市下旗知に所在する日蓮宗の寺院である。日蓮上人が鎌倉から佐渡へ流され  
る途次この寺に止宿し、その夜上人が祈るとまはゆい死を放ちながら天から大きな星が隕石  
の楯の木に降りて来たとの伝説がある。江戸時代に編纂された地誌「新編相模国風土記」  
にも伝説のいわれが詳しく紹介され、其夜日蓮名月に向て法衣を奉せしに、堂前の梅樹は天  
星下りて化益を助く」となどを記されている。

柏琳のストーリーは、恋物語や家伝の宝物探し、善人悪人の決闘などを織り込んだ生草豊  
かなドラマになってくる。

41W x 15L = 615(557)

『紫房秘文』文種は天保七年（一八三六）に刊行された。種彦の校書、歌州東秀の挿絵である。

『鶴屋版』全部六冊「松竹梅合巻三本」という刷り込みもある。

物語は、芸妓をめぐる恋のさやであって、八百屋お七と小姓三三のロマンで、夢に現れた異我  
兄弟と鹿嶋踊り、家裏の銘香の奪い合い、鐘鳴大物の意外な正体を旧縁など複雑なプロット  
になっている。

柏琳の作品について言及した論稿は少なくない。

昭和四十二年（一九六七）三月に発行された『相模原中史』第二巻には、江戸時代の相模原  
の文化に関する記述の中で、「単双紙の作者に磯部の仙客草・柏琳富がある。：柏琳の作品富は  
『増補続南本年表』『仙客外題集』の両書に載せても、どちらにも内容は同じである」と前置さ  
して柏琳の三つの作品名と仙客草・絵師・書肆・出版年を紹介。さらに「花吹雪」の「後  
に添削された柏琳の『星下梅花咲』に柳亭種彦が付した序文の中の『天保三年の春、花吹雪と  
題せしお半長右衛門の絵ぞうしを著ししは、この仙客草・柏琳の作なり。その頃は名を知らな  
りしかば、相州磯部と地名を記しおきたりしが、彼草紙・柏琳の眼にふれて、去年名をい  
せり』」と自ら文種を引用しつつ、「柏琳は種彦の直接の門弟ではなく、天保三年（一八三二）  
最初の『花吹雪』の出版の時は、種彦は柏琳の名前も知らず、もちろん見面識もなかつたのであ

41W x 15L = 615(566)